

優婆塞にトテ、寺に住せしめられた。

元興寺では、寺男を多数雇つて、水田を修つて居ましたが、水運に不便な大船平野は、干照の候ともなれば、終日終夜百姓達は水競ひで大騒ぎでした。そして百姓達は申合せたやうに、元興寺の田の水を盗んで平気で居りました。寺男達の難澁は大したものだった。

今年も干照續きなので、元興寺の水田は、一日と干つて行つて、稲も冷牙に枯れて行きました。

此の悪習慣を直してやうと決めた。優婆塞は、或日「私が行つて、田の水を致さまやう」と申して、大きな鋤の柄を杖に突いて行つて、水門の番をすし事になりました。優婆塞は、鋤の大柄を水門の口に立て置いて、寺の田に水を注ぎました。所が、百姓達は「これは不都合である」と、罵り合ひながら、柄を十五人程で引き抜き捨ててしまふ。又、寺の田へは、一滴の水も注ぎませんでした。是れを見て腹立ちしく思つた優婆塞は、わざと百人引と思はれる程の大石を指つて来て、水門の口を塞いで、一気に水を引か

ました。水田は豊富な水を得て、稲も甚大に稲も、再び青々と殖へつて参りました。

優婆塞、大女に恐れをなした。百姓達は、此水以来、悪事を働く者も無く、大女野の村々は年と共に富み栄えて行きました。

政めて得たとして、僧侶となつた優婆塞は、名を道場法師と名乗り、長年、僧侶の業道を続けました。そして、道場法師の真名は、後の世にも永く傳へて来りました。

○日本灵异記上卷、得雷之喜合生子卷ノ子録 第三十卷。

三月五日記 三明

上庭 女塚

東海道本線を西下して大坂を過ぎやがて神戸に到達  
なると

秋の夜、勢古の字根に雪降り

津守の浦に 寄来り 白波 (夫木物)

の古勢に聞えた、と甲山系の最上峰、油海尾を九百米の武  
の讓葉の峯が見え初め、登り、と甲の字根を直北に眺  
頃海岸端の影影所に達します。影影所は今は神戸市の東  
接續して居ます。市の中の一部かと感ぜられた所ですが、と甲山系  
の断層岩を縫って南流する佐吉川の扇状地帯に到達した所  
あります。

此の影影所の西方に、東明トウメイと言ふ所があります。其處に内務  
省指定の史蹟、庭女塚がございます。

住吉で降参して、處女塚を尋ねますと、小高の岡に十数本の針葉樹が物淋しく立って居ますが、其處が處女塚で、傍には記念碑が建てられて居ります。

塚を訪れた人々は、ありし日の處女を偲び、萬葉歌人の福原歌麿の哀調に噓が、鳴外の戯曲生田川を思ひ浮べ、一の憐れな處女に愛憫の涙を注ぐのです。

今も去る二千年許り昔、攝津國菟原郡葦屋の里に、美しい少女が、ありました。村人は葦屋の菟原處女と呼んで誇美して居りました。櫻井の髪の時も逆ぎて、黒髪を束ねて結ひ上げ、吹の處女は、一層美し、氣高く見えるのでした。處女の噂が次第に伝はると、若者達は、良き機会を待たず、申込まじと考へて居りました。中でも、此の國の菟原壯士と、隣國和泉の國の葦原壯士とは、名に聞えたる若者だけに、其の機会を待たず居りました。

處女の噂が日益に高くなつて行きましたので、二人の若者は、因らば一途に結婚を申込んで仕舞ひました。其處で、處女の方には、二人の中一人を選ばなければならなくなりました。所が、此の選擇評定は、よくならず、見れば、此の二人は、年齢が同じ許りでなく、顔容姿や人柄迄も全く善く似て居りまして、何方が秀れた人とも申しられません。一時は、途方に暮れかけたが、結局、處女は、床し心盡の儘で居り、若者に嫁び、と定めました。

然し、使ひの者に持たせて来た贈物を見れば、同じ位な物も、同じ様に送つて来ておいて、其の心遣いの程に優り劣りはありませんでした。其處で、年紙位の人々の情を、この直に寫すものは無い、と言はれて居り、又、寧ろ、この年紙を調べて見ても、容易に判断が着かず、念々困つて居りました。

「其れでは暫く待つて見ませう。時を總てを解決する、と言ふやう、良き機に成らばせう」と言ひ、母の言葉に従つて、處女は、此の儘、月日が経つたやう、四方の心算するやうにと考へて、待つ事にしました。然し二人の態度に、変化も現れませんでした。

其處で處女は日に益々憂愁の思に籠りて行きました。

見兼ねて父親が申しました。「さう考へて居る身は身の毒だ。二人と此へ行くと男はなして、お前が好きたと思はれる男に極めてしまひたい。さうすれば此の男は諦めるだらうが。」と慰められたが、「心盡しの程にさへ相違のなきものを好きたらと言つてどうして片方の方に極められませう。」と申してやめんと泣くのでした。

處女の為なら火にも水にも入らうと決心してゐる若者は、待たれなくなつて一歩に雌雄を決してしまふと、或日、甲由井に身を固め大力を佩き、靴を買ひ、白木の馬手を取つて荒涼といつて来ました。

殺氣立つた此の二人。姿を見た處女は、高鳴る動悸を鎮めぬ。私故に一人の犠牲者を出さなければならぬと言ふ事は、何と言ふ不幸な身なぞせう。」と泣き伏せてしまひました。

此の悲壯な姿を見た父親は、「此は佳事ではない。娘も自殺するかも知れな

し。」と考へると、気が気ではありません。「何とか為さなければならぬが、良い思案が無いものか。」と胸も割ける思ひでした。逸早く着替けて着きました。生田川に

水鳥が居ふのに氣附きました。其處で父親は脱兎の様に駆けて行つて、若者に申すました。「暫くお待ち下さい。湯氣を鎮めて此の老爺の申し掛ける事

も御聞き下さい。お二人の人心と申せ、心盡の程と申せ人並秀れて居られますが、娘は思ひ悩んで居ります。然し今日こそは、お二人の御氣持が晴れますやうに、是を穩便に解決致し、思ひます。娘が可憐悲しく思召すなり決しては

事は着さいますな。毎日は此の村里を離れた西の方、生田川と申す川がございす。主男には水鳥が浮いて居りますが、其の水鳥を的たして射當てられた方が、娘と一緒にならば事に定めませは如何な事ぞせうか。」と申しました。元より

矢の道に於ても無難の二男者があつた。「仰せの程に致しませう。」と異口同音に申すました。老爺は漸く救はれたと思ひ、安堵の胸を撫下すました。一同は生田川に向かひました。

處女川岸に造られて暮らした高壇に平張を張つた母親と此の壯士の  
果を見届ける事に成りました。

西勇士は「我こそ射止めて處女を得よう」と訊くと現れ出した。

涸水の早に瀬川の山に仕十数羽の水鳥が晝過ぎの光を浴びて無心に遊んで  
つて居りました。

先づ西勇士は射る事にしました。菟原壯士は一番大きな水鳥の頭を仕  
つて、大弓を満月の様に引絞って射ました。矢はまじく速度で飛んで行  
きました。見事に水鳥の頭を射止めた。水鳥は紅の尾を引いて川  
下へ涸水で行きました。

菟原壯士は、尾を組らした。弦を離した矢は水鳥の尾を射抜いた。今  
見えませんでした。其儘川上の方へ流れて行きました。

其の時です。「あつ誰か助け下さい」と叫ぶ母親の声はくさりました。

其日川の聲が切つた。空気が一時に破れ出した。

「獸を逐ふ者は目に太山を見ず」の古語の様に、勝負に夢中になつて居た西勇士  
も、我に返つて高壇の方を見ますと、處女が川に飛び込んて早瀬に飲まれて行  
所でした。若者は逸散に駆け付て行つて、救をうとしました。然し空、甲由目を  
着けた儘でいたので、處女に取附いたものゝ泳ぎ切る事が出来ず、見届ける押  
泳をして沈んで行きました。一端は浮き上りましたが、再び姿を見せませんでした。  
父親も短つた棒に走り廻り騒ぎました。然し最早救う方もありません。  
死骸は、翌日船頭に據つて川下の方から仕付けられました。菟原壯士は處女  
の手を握り、菟原壯士は足に纏つて居ました。菟原壯士の射た矢は、見事に  
水鳥の尾羽を射抜いて居ましたので、和泉の親達も諦められませんでした。  
「時は悔ゆる親、如お親、罵る親で済ませないで、村人に慰められ、  
諦め氣な、追も、死骸を引取つて平らす事になりました。

處女の親は、東明の空地を選んで塚を建て、鶴を平つてやりました。此  
見た、菟原の親は、共に死んだ同い國の者であるから、同じ墓所に葬つてやらう。

して他國の者には決して此の土を犯させまいと言ひ張つて、大竹の筒に、烏帽子  
は狩衣に袴に帯などを刀水、弓矢や太刀も添へて、處女の傍に一緒に埋めま  
した。和泉の葦原の親は、之れを聞いて、「無情有事を言ふものではない。子を  
思ひ親の心に愛りは無いものさしと由りまして、わざと和泉の土を船で運んで  
持つて來、狩衣や太刀などを日常の雑道具を一通り大竹に刀水、  
女の鏡に聲ありました。 反対の處  
持たせて、例

非常に哀れなつた村人は、此の塚を呼んで處女塚と申すました。  
其の昔、行き交ふ諸國の人々に、誘ひ継がれた處女塚の名は、今も其處愛  
称せしめて居ます。

萬葉集 卷九 見菟原處女墓歌一首并短歌(宇橋宗厚)及  
大和物語に據る。 三一三 三三三 三三三 三三三 三三三

### 美濃の瀧

平城の宮におはりました元正天皇の御代に、美濃の國に  
いふ若者がいじまいました。

毎日、山へ行つて、新を切つたり、草花を採つて來たりして、  
其れを賣つて、暮れを立して居ました。

此の若者の家は、年取つた父親が居りましたが、お酒  
愛好家で、朝夕飲んでは、樂々んで居りました。

若者には、母親が有りませんので、かろい人食ひの中にも、せめて  
お酒だけは買つて、差上げなれば、済まないと考へて、  
瓢を腰に着けて、出掛け、夕方、家に歸へる時、買つて來  
て、父、親を喜ばせて居ました。

今日も、奥山へ入つて、新を拾はうとしますと、岩の生え  
居た石を踏んだもので、足を滑べらして、俯せに轉

でくまひました。起き上らうと、頭を上げますと、何處からともなく、お酒の、良い香がくく来りました。「此水は不思議な酒で、思て、香のする方も見ますと、其庭から少し離れた岩の隙からお酒の様な黄色な水がこぼれ、と湧き出て居ました。進付く掬ひ上げ、少し飲んで見ますと、やはりお酒でした。若者「此水を、父親に差し上げよう」と、大変喜んで、其水が、此のお酒を汲んで帰つては、日増に老ひ衰へて行く父を、尉のめて居ました。

此の事が、やがて都の帝のお耳に入りました。

女帝は、靈龜三年九月に、遙々其の地へ行幸遊はせ、おまゝに親しく御臨見になつて居ました。

「之水は、珍しい。若者の忠告を、人並と異なつて居るので、天の神が、お憐れみになつて、此水を出したものであらう」と御せられた。

お酒の湧き出す所を、美石老の瀧と稱せられました。

又若者を、大層にお褒めになつて、美濃守に命じ、其の時、年號の靈龜をお改めになつて、美石老となさいました。美石老の瀧に因つたものと申します。

十訓抄 第六に據る。

父多老

元正天皇、美石老元年八月甲戌(七日)從五位下多治比呂真人廣足を大

濃の國に遣はし、行宮を造らしめ給ふ。

同日丙辰(廿二日)天皇、美濃國に行幸し給ふ。

同日丙辰(廿二日)當者郡に幸し給ひ、多度山の美泉を臨見給ふ。

十一月癸丑(廿七日)天皇、臨軒、詔す、曰はく、「朕、今年九月を以て、美濃國を渡す。

銜に列し、（註）數日に達し、因りて當西若即多摩山、美泉を臨みて、自ら手  
面を盥（註）み、皮膚滑かなし、如く亦痛き處を洗ふに、臨るに愈々、言ふと云ふと無  
睡の躬に在りて、甚く其の驗有し、又就きて之を飲み、浴する者は、或は白髪黒  
髪、或は顔髪、友更に生じ、或は鬚目、明なる如く、自餘の痼疾、咸く皆、（註）中  
昔、麻く、後漢の光武の時、醴泉出づ、之水を飲む者、皆痼疾皆愈、中と、（註）并、  
に白く、醴泉は、美泉なるを以て、老を養ふ可しと、蓋く水の精也、（註）定に惟りに、  
は、即大瑞に合へり、朕庸虚有りと雖も、何ぞ天賦に違はぬ、天下に大救すべし。  
聖龜三年を改め、養老元年と爲す、（註）百歳以上の者には、純三疋、（註）三  
此、布四端、粟二石を賜ふ、（註）孝子順孫、義夫節婦、其の門閭を表  
し、身を終るまで、事勿らしむ、（註）美濃守從四位下、（註）朝臣麻呂、（註）從四  
位上を授く、（註）（續日本紀）

三月九日 記 三

### 西八條の山風

「真能。真能は屋のぬか、噴怒の情を満面に湛へた、大政大臣平清盛、  
海は、中門の廊下に突立つて居た。赤地の直垂に、黒糸織の白金物をまき、  
胸當を著け、銀の蛭巻の小長刀を脇挟んだ、袷袢は、重大事の志起に備へ、  
姿が、あつ事が分る。

大政大臣の御前に畏まつた、筑後守真能は、木蘭地の直垂に、緋織の鎧を着、  
ゐた。入道は、筑後守ほどの格は思ふか。保元の乱に、叔父忠正を、（註）平家一門、  
具牛敷を以て、崇徳院に、御方より奉つた。惟父忠盛御には、院の皇子重仁親  
王の御養子、御掛に、まゝ、（註）たので、御助勢、黙々、（註）難くは、（註）あつたもの、（註）鳥羽院の御事、  
誠の儘に、後白河天皇に、御方より奉つて、（註）先途と戦つたのである。決り、（註）平  
元年の乱には、信賴、義朝に、逆つて、大内山に籠り、身命を賭して、（註）先徒に向ひ、（註）詠軍を  
ひ散らし、（註）御帝を、安んじ奉つたのであり、（註）經宗や、（註）惟方を、捕へる迄には、（註）幾度も、（註）身命  
を、（註）名刺を、（註）授けて、（註）御奉公したのであつて、（註）之れを、（註）思へば、（註）我が一門は、（註）永遠に、（註）朝臣と



物言になつて、良き答であると思ふ。其れを今更は殿上無用の成親や、西光と申す  
下殿な事共の言書亦に従はせ給ひて、二條の大君には、勤もすれば我が一月を新  
平家を滅すの計書を立てさせ給ひては、遺憾があつて、今夜寝る事共  
公たなれば、必ず当宗討伐の院命が下されし事あり。一度院命が下されば、  
朝敵となつてしまふ。如何様か悔いとも最早益の無き事である。搦手て、乱世に能  
る迄、北白河は皇を鳥羽の北殿へ移し参らせよか、或は此の西八條へ御幸を仰  
かす事あると思ふかどうやある。然る柳橋に致すとなすと、必ず北面の武者共は  
弓矢を取つて我に向ふ事ある。因つて此處に對する軍備を急いで準備に待  
共に申す傍へよ。清盛は今後どの様な事がある事も最早決して院方へ御奉  
は致すまい。早速馬に鞍を置き、余が鎧甲を之れへ持つて参れ。と喜ん氣巻  
立馬の判官盛國は、此の首棒に鞍を置き、小松殿へ駆け付け、  
上。と大声に呼ぶ。たのぞ、盛盛仰は立てて出よ。何事かあるか。と尋ねました  
と申すのは、入道殿には最早申由目に身を固の馬に鞍を置かせて、後皇を鳥羽

の北殿へ遷り奉るか、或は入道殿の館に御幸を強ひらる、牛苦を取らました  
言上したのであつた。盛盛は、何の爲に父上は斯様な暴舉に出られたのか不審に  
ました。取り敢へず豆を急いで取らせ、西八條の館へ向かつた。  
門の外下車を捨て、一歩即へ入つて見ると、平家の重臣數十名は思ひの如  
身を固めて中門の廊下に二列に着座して居り、父清盛は、黒絲織の鞆當を  
と言へば、出陣の扮装であつた。櫓から渡れた士や、雑兵共は、度は降り立つて足  
場も無い位、牛に中に長護竿を結ぶ、馬の腹端を引き、由目の緒を締めて、  
下知が有つた事、或は先きお打つて出やうとする氣配であつた。其の中を鳥帽子  
直衣に大紋の指貫を着けた服装で、静かに歩を運んだ盛盛の女は、神々しく、  
床にかつた。

「小松殿出入由。」と言上た、清盛は親を推成を促す事な、常に五戒を  
て、慈悲深く、通常を務めて仁義に向ふ、盛盛を考へて、此の荒々しく扮装を  
取つた、牛早く障子を開け、鎧の上に素襦袢の緋の衣を引き懸けて着た山

胸板の金具が衣の合目から出るべし引き合せ對せ合せして規章の態をわづら  
重盛御世此の暴挙を大いに諫めよと忍んで、伏目勝に端座した父の前を靜  
した。

清盛入道は仰々として「成親卿の謀叛の程は取るに足らぬが今及の事は漸く  
の御書に由るもつてありからし世の中は平穩に立ち及へる迄暫く、法皇を鳥羽の地  
遷り奉るべし此の西八條へ御幸を冀ふ所存であるが、どうであらうと途切れ  
のでした。重盛御は父の言葉を充分聞き清まらぬ中では、と涙を流す  
「事の次第を承るにつけても、平家一門の運命は早や衰亡に向つた存せらるる  
が傾く時は必ず悪事を思ひ立つのが世の習とは申す所なり、父上此の法皇の  
正氣の御幼儀とは思ひはれませぬ。我が國は辺地粟散の地とは申す也、天照大神の御子  
が天下も法統治遊ばし給ふに、常に大和吉野とせられ、未だ居ります。其れを苟  
政大臣とも、朝政に參與する所方が、武器を執つて事々放さるは、禮節も  
ぬ者も存せぬまます。父上には今は法皇の家を御事であり、自ら法衣を捨て、

放儀の叙を取りつとは、五戒五常の道に背き、世の四恩にも相及する決意と存せられ、  
皇恩に報い奉るに覇者の道をせらるるとは、重盛心外至極、四恩の中にも皇恩は最も重  
く、凡そ天下は此れ悉く皇土でございますのに、父上には先祖以来の破格の餘榮を擔つ  
位は太政の至極を止め、重盛へ大臣の重席に侍つて、今や平家一門は、白土の事を私  
有するに至つて居ります。此れ希代の朝恩に據る所、大日本は神國がある以上、神は  
非禮を容れ給はぬが、天照大神、正八幡神の神慮に背いて事を計つても成り得な  
は必死の道理で、平氏の運命は忽ち窮する事と思はれます。其れに既に成親卿  
捕り給ふた止は、大恩におおせられ、何の罪咎を加へさせ給ふ事なさらませぬ。茲に  
非禮を深く謝し奉つて、皇朝の法存に念々忠勤を励み、皇民の爲に益々撫育の至  
誠を致さるるなれば、神明も法守護あつて、佛陀の宮加を受けさせられるでございませぬ。  
然るに法父上にも、若し法門入りの無一折には、院中守護の任にある重盛、此の道義を  
解する大臣大將と共に、君恩の重きを考へ、法所法住寺殿に參集し、只管法守護  
の又を法父上に向け、打ち振るでございませぬ。思へば、法皇の御事、此の不孝の罪を逃れ

ようとす水は、君の忠存には不忠の臣となす。不忠の四非を逃れようとするは、父上の為には不孝、  
子とならなければなりませぬ。至盛の進退に形勢、是非の道も定め難い故、唯々至盛  
の首もとに流されよ。然らば最早院中守護の備へも無く、以後院中の御世も叶はず、従つ  
て世の信實も深奥言も重責も又白皇恩もへも失なひ給うて、平家の没落は必也  
存せしめます。甚だ心細く思はれますが、此の世に永くへて憂世目を見まはすは、一死以て  
然らば、因心に報ひ奉るは、身の果報之れに違ひたものは無いと存がまはす。直ちに侍上  
と召させ給へ、此の至盛が首を切らせ給へいと申して、直衣の袖も絞る許りに這き入  
るべきでした。

逆義を盡した謀言に清盛とも為す術も無く、庭に居並ぶ其武者も皆鎧の袖  
を捲つたのでした。竟に先鋒迄、山嵐の端に押寄せ、軍馬の嘶に響み立つた面をも  
今は山嵐の後の静けさに、緊張の経に、瘦骨さへ感せられ、西八條の館には、淡  
入日が差しく居た。

平家物語 (嵯峨本) 源平盛衰記に據る。 三、四三、三時記

### 最後の希政

源の中納言具行、六少辨俊基、日野の中納言良朝が死罪にせられたとの  
噂が、都に上り来れば、山中三斗、五月の事であった。

資朝卿は北條系俊光の子で、先に同志と朝政の總謀を計ったが、謀叛の怨  
によつて佐渡に流罪の身となつてから最早七年の月日が経つてゐた。今度佐渡の面  
を更に隠政に移すに際し、北條高時は守護本間山城の入道に命じて、湯朝卿を  
殺害せよある事にしたのである。

後の中納言邦光卿は資朝の中の子で、あつて、其母阿新丸と言つたが、十三の夜を言都  
に逆へ、湯堂の仁和寺の辺に隠れ住んで、父許さうの目を千代の田舎で待つて居たのであつた。  
此の悲報を聞いて、「父上此の世に亡後は何の甲斐もあつて佳き永らへられやう、雨は林  
後の有栖見見出た上で、共に斬られて、黄泉の道途を致しませう」と、固く決心する所であ  
つて、母上に湯殿を乞うたのでした。母は熟々、「佐渡は人も通はな、鶴小島も道が遠  
く波も高い所、聞いて居ます。其れなるとどうも可弱い出身が行われませう。父上の亡



不孝の罪を深く悔いて袂の乾く暇も無かつたが、本間の無情な仕打ちを思ふと断腸の思ひで嘔吐の法に墮ぶつてあつた。「此方、お中納言様の中屋の御方でございます」と暑氣に誘つて、合掌の午を緩めない中納言の向ひて居る方を見ますと、竹藪の中に深い塚を廻らぬ塚を塗り固めて、行き來の人は見受けられない利風を系な荒郊が見受けられた。情知らずの女中の為には、中納言に淋しく縛られて居られる。難鬼一人たへ父上と一緒に暫く住ませたところも、何の障害も有りませぬ。それだけに父上、今生の最後の袂も叶へず、今生と言つては其れが最早、今日一日の靈命とも言ひ難いのに、此儘お捨てる。血を吐く此の思ひを、世の事と結ばせやうとするのが、情無いとあはれは、金ぐ嚙殺の事柄が燃え、奉仕のであつた。

五月二十九日の暮方、中納言から引き出された、賀朝御は、「湯浴の法も無からず、行水も」と言ふ中納言の老人の言葉に、最後が迫つた事を感ぜ、「嗚呼、世は無常とは申す、余ら何と言ふ情無きことであらう。遂々を尋ねて来た我がまが、此處に居るやう一日する、今宵が

事が許されな、此の儘死別するとは。別れて早や七年の歲月さぞか、阿新は生きて居るであらう。無念至極である」と申して、重ねて封面の儀を、お心清くまが、何等の法汰も無かつたのでした。今は此れ迄と思つて、賀朝御は其後は、を嚙んで何事にも口を閉させませんでした。

最後の望を失つた賀朝御は、止めまも無く、膝を悲嘆の涙と、唯黙つて居る。一息を懐き、儘、瞑目、静座して居る。その夜は、入って、差白甘の朝、朝御は、御を護り、静かに敷皮の上から座し、静世の偈を書き残さぬ。その時、五世、假成、形、四大、今、歸、定、符、首、堂、白、刃、截、断、一、陣、風、との律詩に、年月日を記し、下に姓名を書き添へ、筆を掲げると、切牛が後、リ、大、刀、が、閃、め、た、と、思、小、瞬、間、出、首、は、敷、皮、の、上、に、落、ち、定、ま、り、軀、の、み、が、其、處、に、残、り、な、く、残、つ、て、居、ま、し、た。

教戒の僧が来て、形許りの鏡経を濟ませ、火葬して、遺骨を小箱に納めて居



此の日も夕潮に包まれた頃、漸く一匹の亀が懸りまゝに浦へて  
て見ますと、其れは、五色の可愛い一亀です。珍らしい亀といは  
思はれまゝが、船の中へ入水し置りて、其儘寢るまゝにまゐりました。  
「い〜い〜」と呼び覺えたり、起きて見ますと、其れは、此の世の人  
思はれな一程美しい姫の呼声だったのです。

不思議に思つて、「此の存在遠い海の果に、貴女はどなたか、い  
やいましたかですか」と、浦嶋は尋ねて見ますと、姫は微笑さ  
ら「私は、もよ風に乗つて参りました。常世の者といふおま  
・申すまいと。もし、尚、一編の常世の國へ参りませんか」と  
いきました。浦嶋は、「常世の國」と言はれたので、治はは朝日に居ます  
も、見た事もありませんので、急に、行つて見たく成りました。  
「では、御供も取りませう」と、船棹を其方へ向け、すく〜と進ん  
行きました。

敷知れない大波小波を乗り越えて行く中、浦嶋はすつかり寢  
入つてしまひました。浦嶋は目を覚めた時には、全く驚く外はあり  
ません。其れは、真向の島に、赤い珊瑚の柱で建てられた、青い  
屋根の綺麗な御殿が幾つも見得たりはありませんか、すつかりした  
五重の塔も立つておりました。金や銀の金具が朝日に映り耀いて、  
そのはく〜壁へ輝きまゝに麗は〜さす。

船が港に着きますと、姫は先に立つて浦嶋とるを案内して、  
立派な御殿の御門の前へ行きました。

「此處で暫くお待ち下さい」と、言つて姫は御殿の中へ入つて  
まゐりました。浦嶋さんは、物珍らしさから、彼方此方見廻して居ます  
と、可愛らしい子供達が寄り集つて来て、「あの方は、乙姫様と法  
一緒に来られた方なんだよ」と、話々合つてい〜く〜しておりました。

浦島さんは、「あの姫は、乙姫様だったのか。こゝれは夢ではなからう。と、今迄の出来事を考へておますと、棟に巣立った燕が、  
若くは浦島さん、ようこそ御座下さいます。私は、其の昔、  
貴殿の御家の御門で云つた雛でござります。どうぞおゆつくりと  
言つて、飛立へ行きました。白鳥の淵の橋が、濃い緑の葉の間  
に、白い大きな花を幾つも、附けておました。一番大きな花の中  
に、まゐりました。浦島さん、もうこそいらつてもよいました。どうぞおゆつくり  
御泊り下さい。此處には、珍らしい物も海山の御座りますから」と、昔は  
いふ香を、あたり一面に漂はして、浦島さんを喜ばせて下りま  
した。「あ、来て良かった」と、浦島さんは思ひました。

其の中に、乙姫様が、御付の人々を連れ下り出て来ました。浦島  
さんは、迎へて下さる儘に、長い廊下を渡つて、奥御殿へ参りました。  
広間には、乙姫様の御両親や侍女達も、お装束して、浦島  
さんを待つておりました。

浦島さんは、此の人に御挨拶を、終められる儘に、高座に上  
りました。御両親は、「良く御出下さいました。此の國には、随分  
よい物が、多いにござります。草や木や、鳥や花も、語り事が出来  
ますから、心から楽しんで戴ける事と存じます」と申しました。乙  
姫は、言葉を改めて、「此國へ来られた方は、決して歳を、延ば  
ないばかりが、人間界の格を、死の驚愕と言ふものは、人々有  
ません。不思議な國には、有りませんか」と語りました。そして  
甘い海山の御施を、海山出下り下りました。何を戴いて見  
ても、甘い物許りでした。乙姫様の御姉妹が、昔は、いふ御酒を、  
交るゝ終めました。島の乙女達が、美しい舞を、微妙な琴



の音に合せて舞って見せました。

浦島さんは、夢に夢見心地で、幾日も  
くまらした。

或日、ふと浦島は、故郷の事を思ひ出しました。父母は私が居なく  
なつて、心配して居るにたうらぬ。もう三年も経つたのだと考へると、淋  
しい不安に籠衣はれさうした。そして、家に帰へて、お慰めをよめては  
と思ふと、落着いて居るのをやめました。其處で、乙姫様は、「私は國  
のこと心配でありません。一度帰つて、両親に會つて參りなすな  
ます。」と、逸る心を押へながら申しました。此水を開いた乙姫様は  
がっかりして、涙さへ浮べ、「娘は貴殿様が永久に此處に止まつて居る  
戴けようものと思つて、遂に御守申しました。然し是非ともお帰  
と思召しては、致し方もござぬません。」と申して、しきりと奥の洞

に立つたかと思ふと、立派なサ時繪の手箱を持つて来ました。「此水は  
玉手箱でござぬます。常世の國では一番大切な宝と致して居ります。が  
再び流れて下されます。流標として此の品を御助け致します。でも、どの  
様な事が起りましても、決して箱の蓋を開けてはなりません。」と名  
残惜くさうに、言葉鋭くおつしやいました。

浦島は、旅支度が済むと、玉手箱を抱えて、父母の國を指して出  
立ちました。又幾日もくまらした。大波小波に逢られて進みませんでした。

波の音に、目を覚まして見ますと、其處は懐かしい生れ故郷の海岸に  
近い所でした。浦島さんは、船に疲れて寝てしまつておたのでした。  
船が岸に着くや否や、真一文字に我家に向ひました。帰へり着  
いて見ましたが、どうした事か、其處に在るべき家が見当りません。心  
を沈めて、邊を見廻りますと、村の様子がすつかり變つておて、

通り過ぎる人も皆見知らぬ人許りでした。朝夕見慣れた鎮守  
の森も、其の後形すら有りません。

一人の老人が通り掛りましたので、「一寸湯屋ねねへお尋ねしますが、住江の浦  
島屋の家は、どうなりましたか」と、泣き交った気持で尋ねて見ました。  
お爺さんは、すがる杖をよめず、訝々さうな顔をして、「あの浦島さん  
ですかえ。何でも私の曾祖父さんの語り種には、浦島さんと言ふ方は  
釣が大変上手だったがさ、或日沖に船を出した有り、幾平待つつも  
歸へらつしやす、其中に此處の浪雨は亡くなられ、其の家は絶え  
てしまはつしやつたとか、さあもう二百年も先の代の事かひなあ  
と、語り聞かせたのでした。

浦島は、餘りの変り様に、かたまりも、當も無く、彼方此方告ぎ  
廻りまわした。そして歩き疲れたと、浜辺の砂の上に腰を下ろして

青浜原の雲の波牙をちつと思詰めるのでした。そして存し中の  
父母の事をしきりと考へ續けまわした。

ふと、大切に抱えて来た玉手箱の事に、思ひ着いた浦島は、溺れ  
る者の気持の果無さに、「此の箱を開けて見よう。きっと昔が今に  
へるか知れない」と、淡い光を述る思ひで、固く結ばれた紐を解  
いて、蓋を開けて覗いて見ました。するとどうでせう。白い煙  
が、すうつと立ち上がり、目を見事に、づん／＼と昇り、やがて空  
世の國の方へ靡々行きました。

「どの様な事が起きましたか、決して箱の蓋を開けてはなすまいと  
と言はれた、折言の言葉も、云はれて居たかやうだ。

うまいった。此れは、いと、叫んで、残念がりました。最早取返  
す術もなさぬません。ぢたんだ踏んで、飛ぶより、泣き叫んで、後



後世に傳へり。後世に傳へり。水の江に浦島の子。家地是也。

返歌

常世迎に任ねるもりのを 銀乃 己が行きよから 鏡や足の子

二、丹後、風土記、浦島子

樂謝郡 日置の里。此里に岡り村有り。此の人夫 日下舟の首等先程は名を岡村の此と云ひ、人とも容貌秀美にして、風流なまこと、新井浦浦江の浦に居たり。日置小舟の岡村 伊豫部の鳥養の連が記す所は、相乘くをなす。此れ、時竹由のしりも陳へり。長谷。刻念の宮に御宇天皇の沛世、蝦子独り小舟に乗し、海中に流れて釣を為す。三日三夜、舟に一魚に得ず。乃ち五色の龜を得たり。心に奇異とて思ひ、船の中に置きて即ち寢たり。舟中婦人と為り、其の容貌美麗にして更に比ぶべからず。蝦子問ひて曰く、人定遂に是を海庭に人へし、詭計を心に来りや。女独微笑み、對て曰く、風流之士独り蒼海に流れ、遂に是に勝らん。風流之士就きて来り。蝦子後問ひて曰く、風雲何處より来り。女独答へて曰く、天上仙家の人有り。請くは馬鹿の力、相誤る愛に乘せん。人夫大驚て、神女たるを知り、懼れ無きにて驚めし。女独曰く、

「賤妻の意は、天地と共に畢へ、日月と得に抱む。但し女君何すれば許さぬの意を先んせしめんとす。」  
蝦子答へて曰く、更に言ふ所無し。何にか觸れんや。女独曰く、君宜しく棹を廻らして、蓬山に遊ばしめ。蝦子從つて往く。女独目を眼ら教む。即ち不意の間に海中博犬の嶋に至る。其の地土を教む。如く、岡村隆興、樓堂は玲瓏、目に見る所、耳に聞かざる所なり。手を携へて徐に行き、一つの太定の門に到る。女独曰く、君且、此處に立ち給へ。門を聞きて内に入る。即ち七の堅子來り、相語りて曰く、是は是此賣の夫なり。亦八の堅子來り、相語りて曰く、日置村龜此賣の夫なり。女独に、女独の名は龜此賣なりとを知らしめ、乃ち女独出で來りしとき、蝦子、堅子等の事を告ぐる。女独曰く、其の七の堅子は曰く、堅子なり。其の八の堅子は、堅子なり。君怖る、其れ、即ち前に三すて引き送す、内に進み入る。女独の父母共に相迎ふ。擲して定坐す。斯く人問と仙都の別を、林と流、水と沖と、偶に人會する事も誤議す。乃ち百品の芳味を薦め、兄弟姉妹等、杯を伊て、献酬。隣里の幼子半江、廟に、て戲水、接し、人、仙奇、家、亮、神、憐、逢、逸、其、歡、喜、為す。人問に、互、樹、れ、茲、に、於て、日、暮、る、を、知、す。但、ち、黃、昏、の、時、は、群、が、る、仙、侶、等、漸、々、に、退、散、し、即ち、女、独、獨り、留、ま、る。雙、履、袖、に、挿、り、天、婦、の、理、を、成、す。時、に、仙、手、苗、俗、も、送、れ、て、仙、都、に、送、ら、れ、鏡、に、三、歳、を、送、ら、り。忽ち、土、を、懐、く、の、心、を、起、し、独り、親、を、恋、ふ。故、山、吟、哀、歌、系、に、及、び、つ、く、嗟、歎、日、に、益、す。女、独、

「賤妻の意は、天地と共に畢へ、日月と得に抱む。但し女君何すれば許さぬの意を先んせしめんとす。」  
蝦子答へて曰く、更に言ふ所無し。何にか觸れんや。女独曰く、君宜しく棹を廻らして、蓬山に遊ばしめ。蝦子從つて往く。女独目を眼ら教む。即ち不意の間に海中博犬の嶋に至る。其の地土を教む。如く、岡村隆興、樓堂は玲瓏、目に見る所、耳に聞かざる所なり。手を携へて徐に行き、一つの太定の門に到る。女独曰く、君且、此處に立ち給へ。門を聞きて内に入る。即ち七の堅子來り、相語りて曰く、是は是此賣の夫なり。亦八の堅子來り、相語りて曰く、日置村龜此賣の夫なり。女独に、女独の名は龜此賣なりとを知らしめ、乃ち女独出で來りしとき、蝦子、堅子等の事を告ぐる。女独曰く、其の七の堅子は曰く、堅子なり。其の八の堅子は、堅子なり。君怖る、其れ、即ち前に三すて引き送す、内に進み入る。女独の父母共に相迎ふ。擲して定坐す。斯く人問と仙都の別を、林と流、水と沖と、偶に人會する事も誤議す。乃ち百品の芳味を薦め、兄弟姉妹等、杯を伊て、献酬。隣里の幼子半江、廟に、て戲水、接し、人、仙奇、家、亮、神、憐、逢、逸、其、歡、喜、為す。人問に、互、樹、れ、茲、に、於て、日、暮、る、を、知、す。但、ち、黃、昏、の、時、は、群、が、る、仙、侶、等、漸、々、に、退、散、し、即ち、女、独、獨り、留、ま、る。雙、履、袖、に、挿、り、天、婦、の、理、を、成、す。時、に、仙、手、苗、俗、も、送、れ、て、仙、都、に、送、ら、れ、鏡、に、三、歳、を、送、ら、り。忽ち、土、を、懐、く、の、心、を、起、し、独り、親、を、恋、ふ。故、山、吟、哀、歌、系、に、及、び、つ、く、嗟、歎、日、に、益、す。女、独、